



わけいってても、
わけいってても、

インド

蔵前仁一

旅行人



ワルリー画
マンキ・バブー・ヴァエダ
バルー・ラドキヤ・ドゥマダ
(マハーラーシュトラ州)

見慣れたものが、何かをきっかけにして、突然見え方が変わるといふことがある。僕はインドによってそれを二度体験した。

一度目は、最初にインドを旅したときだ。初めてインドに行つて、だまされたりぼられたりと、いろいろとつらい目に遭い、這々の体で日本に逃げ帰つた。ところが、ようやくインドから逃げ帰つてきたというのに、着いたところは元の日本ではなかった。いわゆる「カルチャー・ショック」というやつだ。これまで当たり前のように存在していた自分の周囲の風景が、まったく異なったものに変化してしまつたのだ。インドと日本のあまりの違いに、僕は混乱し、当たり前だった日本が当たり前ではなくなった。これがきっかけになつて、僕は世界各地の旅に出るようになった。

二度目は、インドのミティラー画を見に、ビハール州を訪れたのがきっかけだった。もう何年も前、それがいつだったか正確に思い出せないのだが、一九八〇年代中頃のことだったか。僕はカルカッタ(現コルカタ)で、たまたまヒンドゥー教の宗教画を売っている男から一枚の絵を見せられた。それはま

るで素人が描いたような絵で、お世辞にもうまいといえる代物ではなかった。僕はいらないと断つた。それがミティラー画との初めての出会いだった。

そのとき、僕はその絵が何であるのかまったく知らなかった。だが、なぜかその絵のことが、印象深い旅の風景のように心にずっと残っていた。いったいあの絵は何だったのだろうか。

それから数年後、僕はニューデリーで再びその絵と遭遇する。それはガバメント・エンポリウムと呼ばれるインド州政府直営の土産店だった。そこで売られていた絵は、一目であの絵だということがわかった。カルカッタで見た絵よりも大きく、そしてかなり上手に丁寧に描かれていたが、この絵の持つ独特の民俗性——プロの絵描きには決して描けない土着性のようなものが、その絵にも濃厚に漂っていたのだ。僕はこのとき初めて数枚の絵を買つた。

日本に持ち帰つて、絵のことを調べてみると、それがミティラー画と呼ばれるものであることがようやくわかつた。だが、当時はまだインターネットもない時代で、それ以上の詳しいことがわからないまま、それらは長い間ほったらかしになっていた。



本当の意味でミティラー画と出会ったのは、それから何年もたってからである。僕は、このわけのわからない絵のことを、ずっと心の片隅に置きっぱなしにしていた。だが、記憶力の乏しい僕にしては珍しく、忘れ去ってしまうという事はなかった。あるとき、たまたま大きな額を手に入れ、その額にミティラー画を入れて部屋に飾ったのだ。

それが、ある意味で三回目のミティラー画との出会いだったかもしれない。この絵は、いったいどこの誰が描いたものなのだろう。絵を前にして、僕はあらためてそのことを疑問に思った。このときはもうインターネットで検索することができるようになっていた。これでようやくミティラー画の概要を知ることができたのである。素人が描いたような絵だと感じたのも当然で、それはミティラー地方の普通の家庭の女性たちが、もともとは家内安全や豊穡を祈って家の壁に描いたものだったのだ。

こういう絵が存在することを、自分で買って持っているながら、全然わかっていなかった。僕はその壁に描かれたミティラー画を見てみたいと思った。それでインドへ向かったのが、この本の第一章に出て

くる旅行記である。

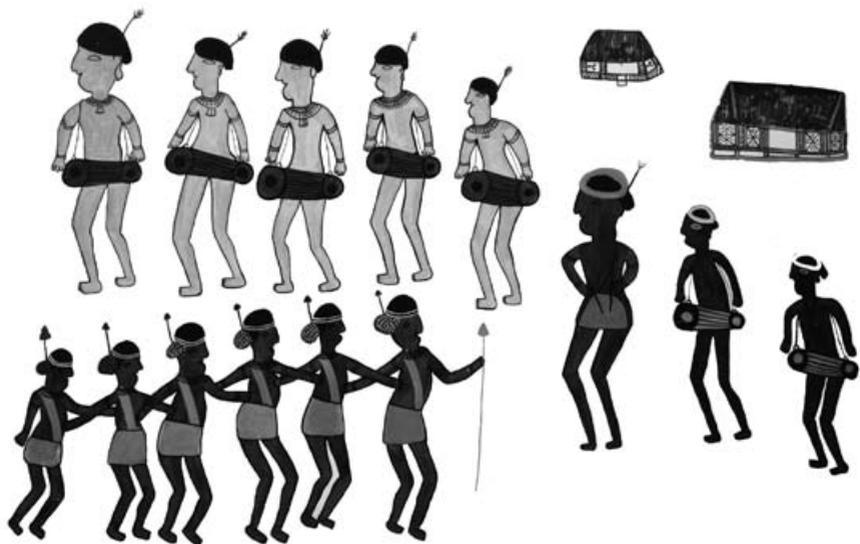
そして、この旅で、僕のインドの風景が再び変わってしまう。ミティラー地方のマドゥパニで絵を見ていくと、それらが単にヒンドゥー神話を描いたわけではないことがわかってきたのだ。

これらのミティラー画の中には、「元は入れ墨として女性の肌彫られていた絵を紙に写した「入れ墨画」と呼ばれるものがあった。これはヒンドゥー神話とはほとんど関係のない物語をもっており、これらの絵が示す世界は、なんとヒンドゥー教以前の世界であるというのだ。

ヒンドゥー教以前！

この言葉に僕はめまいさえ覚えたほどだ。ヒンドゥー教が成立するのはおよそ一七〇〇〜二二〇〇年前のことだ。およそ二〇〇〇年前の文化の痕跡が、インドにはこうやってまだ残っているなんて！

僕はそれまでインドに数え切れないほどやってきて、延べ数年間も旅をし、インド各地をまわってきた。インドのあちこちでヒンドゥー寺院を参拝し、派手に彩色された神々の像や、精緻に彫刻された石像など、さまざまなヒンドゥー文化に接してきた。



ムリア画
ベルグール・マンダヴィ
(チャッティースガル州)



入れ墨画
ウマー・ラーイ
(チャッティースガル州)

れてきたのである。ただ、一般書として世の中に出まわっている日本語の本は極めて少ない。だから、ネット以前の時代にはなかなか調べることができなかった。

もしかしたら、僕がこれまでインドを旅したときに見たものは、ヒンドゥー文化より前のものだったのかもしれない。ただそれを知らずにいただけのことではないか。

そういわれれば、以前インドのカースト制度のことを調べていたとき、バラモン、クシャトリア、ヴァイシヤ、シュードラというクラスの下に、不可触民・指定部族という言葉があったことを思い出す。あのときは意味もわからず、さして不思議にも思わなかったが、あの指定部族こそがアディヴァシーのことだったのだ。彼らが原インドの文化を今でも残している。あの魅惑に満ちた、素材で美しい描画の中に！

そう思うと、僕はその絵を見ないわけにはいかなかった。アディヴァシーの絵を求めて、新しい、いや古層のインドへ旅立とうと思ったのである。

ミティラー地方にやってくるまで、ミティラー画もそういったヒンドゥー文化の一つだろうと思っていたのだ。

だが、一見ヒンドゥー文化を装いながら、あるいは部分的にはヒンドゥー文化と同化しながら、それは以前の文化を今でも受け継いでいる人々がインドには存在し、それらは今でも描かれているということを知って、僕のインドの見方は大きく変わったのだ。

三五〇年前、アリア人がインド亜大陸に進入してくる以前にインドに住んでいた人々は、南インドのドラヴィダ系とオーストロアジア系の人々だったといわれている。こういったインド先住民を、インドでは「アディヴァシー」と呼んでいる（英語でいえばネイティブ・インディアンになるが、こう呼ぶならアメリカ・インディアンと勘違いしそっだ）。

こういった知識は、僕が制作・発行している旅行雑誌「旅行人」で、「インド民俗画の世界」という特集を組んだ際に、お書きいただいた方々の原稿を読んで学んだものだ。当然だが、昔から知っている人は知っていて、取材に行っていれば、撮影もなさ